

メープルレター（77）

猛暑の狂い咲き

気がつけば9月も二週目に入りつつあります。春がなく、夏がなく、今度こそ美しい秋がくるだろうとブルームーンを眺めながら祈っていたのですが、やってきたのは32-34度の猛暑でした。

八月から九月にかけては、カナダ東部を西へ、北へと旅をしていました。8月半ばに、4年ぶりのカナダ剣道選手権大会に出席のため、ドリトル先生とマダム田中は西へ550キロのトロント郊外の町に車で出かけていきました。久々に晴れ、目的地までスムーズな旅でした。

ところが、ホテルに着くや、ドリトル先生の顔は蒼白になったのです。

「タイヤがパンクしているんだ。ランフラットだから何とかこまできたけど、今みたら、裂けて完全にパンクしている。これでも、まだどうにか50キロ位は走れるけど、モントリオールまではねえ。。。」

「えーっ！」

マダム田中も蒼白。

「レクサスはどこでも僕を守ってくれるって言ってたんだから、どこか営業所が見つかるんじゃない？」

ドリトル先生は黙りこむこと一晩。翌朝、アイパッドで検索してホテルから10キロほどの所に、レクサス営業所を見つけ、大会の開会式で笑顔で挨拶をした後、ストレス一杯で営業所までスピードを落とし、パンクしたタイヤのまま直行しました。対応は迅速で検査結果もすぐ出て、タイヤ交換となったのですが、それでも3時間はかかります。レンタルをして会場に引き返し、3時間後に戻り、自分の車に戻ることができました。こうして、トロントの高級レストランでの優雅な夕食の夢は一本のタイヤ交換代金に変わってしまいました。

それにしても、ここは中国かと思うほど、営業所の中は中国人で溢れています。顧客、従業員、全てが中国人でした。待合室の無料サービスのケーキやパン、コーヒーをむさぼり、食べ散らかして騒ぐ中国人に囲まれ、ドリトル先生は、たった一人の穏やかな、飲み食いしない白人でした。スーツを着込んでいたせいか営業所の所長と勘違いされ、質問に来る人の行列がで

きたのです。そういえば、ホテルの顧客や従業員も剣道関係を除くと全て中国人でした。近くのレストランも中国人ばかり。このあたりは、中国村なのかもしれません。怖ろしいほど中国の侵略を感じます。

剣道選手権大会は、若い世代が頑張るとても良い大会でした。カナダ各地からやって来た旧知の先生方にも久々に会え、ドリトル先生は楽しそうでした。個人戦やチーム戦の優勝者や上位者の中から、来年の世界剣道選手権大会の選手たちが選出されます。驚いたのは、参加した女性選手たちの多くが韓国人だったことです。若く（17-18歳）、素早く、実に上手なのです。彼女たちは、カナダ人として、世界選手権大会に出ることになるのですが、日本人が第一線で活躍していた時代は終わりなのかもしれないとマダム田中はため息をつくのでした。

最後の一日は、トロントのダウンタウンのシックな一角に出かけていきました。この一角だけは、騒がしいアメリカナイズされたトロントの町とは違い、昔ながらのヨーロッパ的な美しい建物と街並みを残っています。美味しいコーヒーを飲み、ケーキを食べ優雅なひと時でした。

「あれ、ちょっと見た。今、ホモカップルが通って行ったよね。ベビーカーに赤ちゃんが眠っていただけで、彼らの赤ちゃんということなのかしらね。」

「今、流行りだからね。でも、嫌味のない素敵なカップルだったよね。この一角だとそれもありかなあ。」

人の在り方も時代とともに変わっていくようです。

大陸横断高速道を東にとって、モンリオールに帰ったのは翌日の事です。快適なドライブだったのですが、

「高速がなくなった。！」

「えっつ？」

大陸横断高速道路401号線は途中で工事のため閉まっていたのです。<こちらのルートを>という指示に従って出たのは、ど田舎の小道。緑の田畑の中に、時々家が一軒、時々牛が一頭、時々馬が一頭、通る人もなく、家もなく、見渡す限りただ田舎。

<のんびり行こうよ、俺たちは>そんな昔のコマーシャルソングのように、田園風景を楽しみながら、笑いながら、のんびりとドライブです。低速で道をさまよいながら約二時間、やっと高速道路の続きにたどり着きました。GPSがなかったらたどり着けなかったかもしれません。雪だったり、土砂降りだったり、ガソリンが切れたりしたら、どうなることでしょう。

二週間後に、ニューブランズウィックの義理の次男を訪れることになりました。北北東に900キロのドライブです。中間地点のセントローレンス河沿いのリビエール、ド、ルーで1泊して一休みをすることにしました。このあたりは、河も海のように広く、塩辛く、潮の満ち引きがあります。風景は美しく、昼間の干潟が徐々に満ちていき、海のようにになると対岸に夕日が沈んでいきます。

翌日は、徐々に東の海岸に向かって下がっていくニューブランズウィックの森を抜けて、フレデリクトン向かいました。早朝だったこともあり、白い霧に覆われた森の緑をぬけ、時折見える湖水にはもやがかかっていた。水墨画のようです。通る車はほぼなく、緑と水の沈黙の世界です。カナダの無限の広さと豊かな緑を感じます。

GPSに頼りきりのドライブを終え、やっと義理の次男の家に着きました。昼食に間に合わせて来られないかと、次男から途中で電話が入りました。旅先のハイテクとは実に便利です。娘一家が既にモントリオールから着いていて、玄関で出迎えてくれました。次男一家、娘一家との楽しい再会です。美味しい地元のフランス人の作った、チーズ、パテ、孫息子のつくったシュークリームデザートなどで昼食を済ませると、次男の嫁は、カリブ海のマルチニクへ仕事のため旅立っていきました。

次男は食材に凝り性なので、夕食は地元で取れたエビ、生ガキとシャンペンでスタートし、メインは地元産の鴨の胸肉のロースト（森で取ったキノコを添えてある）、デザートはひと箱借った地元のブルーベリーとヨーグルトでした。カナダで美味しい食材を手に入れるのは一苦労なのですが、地元のネットワークで直接買い入れているようです。

大学で森林学と地球温暖化を研究したり教えたりしている次男は、温暖化に耐える樹木の研究に忙しく、疲れて果てていました。膨大な研究資料、実験、カナダ、アメリカ各地での樹木の種の採集など、終わりなき戦いを繰り返し、責任の重圧が増していたようです。もともとマイペースな子なのに、書いた記事が認められたとは言え、すっかり売れっ子になったこの暮らしは耐えがたいのかもしれない。彼のいらだちが気になっていたドリトル先生は、老体に鞭うって900キロの道をやってきたのでした。話が聞けただけでも、この旅の意味はあったようです。

短いフレデリックトンの旅は、マダム田中は、傍で笑い続ける次男の娘と訳の分からない時間を過ごすことになりました。次男は、自分の娘がこれほど、楽しそうに大口を開けて笑い続けるのは見たことがないと驚いていました。

「何がそんなに楽しいのかしら？」

「さあ？君は別世界の人間なんだね、あの子には」

ドリトル先生も驚くばかり。

「日本に行きたい。あの日本のお弁当を食べてみたい。」

孫娘は、目をキラキラさせて話していました。

この孫娘の頭の中には、マダム田中は変わった日本人のおばあちゃんとして、永遠に記憶されることになりそうです。さて、娘の娘はどうかといえば、この滞在中、泣き続けていたのです。

「ボンジュール、ばあば」

の言葉を聞いた後は、泣いていました。旅疲れかと思っていたら、中耳炎を発していたらしく、娘と婿殿は孫娘の手当で走り回っていたのです。結局、最後の日の朝に、緊急病院に行き、薬をもらい、帰途につくことになりました。

1日、家族で遠出をし、ファンジー湾に出かけていきました。世界でも稀な潮の満ち引きの落差の大きな所です。その落差は14メートルにいたるそうです。港につけられていた2000-3000人乗りの豪華客船は満ち潮で着いたらしく、引き潮の昼間は大きな船がお腹を突き出し、全景を丸出しにして港にふんぞり返っていました。満ち潮になったら、出発するのでしょうか。

この町で食べたご当地料理、フィッシュアンドチップスはなかなかの物でした。お魚（鱈）が新鮮で柔らかく、口の中でじゅーっと溶けるようでした。

翌日、娘一家は緊急病院の後、次男が用意してくれた、とれたてブルベリーがたっぷり入ったホットケーキで朝食を済ませ、ケベック経由（一泊し、翌日水族館に寄る）ですっかり上機嫌になった孫娘と帰途につきました。ドリトル先生とマダム田中は、リビエール、ド・ルーにもう一度立ち寄り、茜色に染まる対岸の空の日没を一杯飲みながら眺め、ゆっくりと時を過ご

し、帰途につきました。ドリトル先生は、ミッションインポッシブルの研究に苦悩する息子とゆっくり話せ、安堵しての帰路でした。